「花と緑のぐんまづくり」の開催特性と地域連携の評価に関する一考察

松田 拓也[1]・塚田 伸也[2]・山田 真次[3]・森田 哲夫[4]

[1]正会員　藤岡市都市建設部都市施設課（〒375-8601 群馬県藤岡市中栗須327）
[2]正会員　前橋市都市計画部都市計画課（〒371-8601 群馬県前橋市大手町2-12-1）
[3]正会員　群馬県県土整備部都市計画課（〒371-8570 群馬県前橋市大手町1-1-1）
4正会員　前橋工科大学社会環境工学科（〒371-0816 群馬県前橋市上佐鳥町460-1）
E-mail:tmorita@maebashi-it.ac.jp

本研究は，群馬県の花と緑のぐんまづくりにおける事業の特性を把握するとともに，地域連携の影響やレガシーについて評価を試みた実務研究である．研究の結果，本イベントの特徴に高校生の関わりがあり，花を育て地域の人との協働で会場に飾花したことなど，農業高校の参加や活躍が企画段階から見られた．また，イベント関係の行政担当や学校教諭からのヒアリング調査を通じて，活動を通じたことがその後の学校教育に影響を与えることも明らかになった．花と緑のぐんまづくりのレガシーは，オープンガーデンの新規取組みや活動継続，花壇の維持管理と多様であるが，周囲を巻き込む民間のリーダーの発掘や高校生の学校教育へ影響が最も注目すべき重要なレガシーであると考察した．

Key Words : *event, regional cooperation, agricultural high school, school education, evaluation*

1. はじめに

(1) 研究の背景

人口減少・少子高齢化，気候変動に伴う災害リスクの増大といった課題への対応を踏まえ，社会資本整備や土地利用に自然環境の持つ多様な機能を賢く利用するグリーンインフラの取組みが期待されている[1)]．グリーンインフラの取組みを推進することによって，自然環境が有する機能を引き出し，地域課題に対応していくことを通じて，持続可能な社会や自然共生社会の実現，国土の適切な管理を行うことを目指すことを目的としている．

グリーンインフラを推進するためには，市民に身近な緑や環境に対する効用を理解してもらうことや，緑の興味や関心を深めること，すなわち計画段階での普及・啓発が重要と考える．また，緑を通じた多様な形の交流・連携機会が，地域コミュニティを創出・活性化していくことも重要と考える．

その1つの方法として，花緑イベントによる普及・啓発事業がある．花緑イベントは，グリーンインフラの本体である公園緑地を中心に開催され，全国レベルで実施される全国都市緑化フェア（以下，都市緑化フェアと称す）や，地方都市レベルで行われるイベントまで様々な手法や規模で実施されている．本研究では，地方都市で実施されてきた花緑イベントに着目した．

(2) 既往研究と研究目的

本研究に関連する研究をレビューする．はじめに，イベント事業の評価として，計画分野における奥村[2)]の施設整備の投資効果をモデル化した研究がある．引地[3)]らは，まちづくりイベントに対する参加に対する意識や意向の形成過程を分析し地域差が生じることを示唆した．

花緑イベントについては，野中[4)]の花緑イベントとオープンガーデン来訪者の行動に着目した研究がある．三分一ら[5)]は，全国都市緑化フェアを機に継続的に行われたオープンガーデンの経済効果に着目した他，オープンガーデン実施者の意識構造を分析することにより，「庭を開放する」と「まちづくり」の意識構造に強い関連性があることを示唆した．尹ら[6)]は，オープンフォレストを事例としたイベントの成果として市民団体間の連携強化と運営体制の構築，行政等の多主体との協働を挙げた．

イベントのレガシーに関する研究として，吉武ら[7)]は，イベントを一過性のものとしてではなく継続していくためにどのような要件に着目して検討を行った．結果，イベント継続のモチベーションを類型化するとともに，コミュニティへの愛着や帰属意識を考察した．中村ら[8)]は，全国都市緑化フェアの効果とイベントレガシーとしての評価を行い，事業の効果と継続性について考察した．

以上のように，イベントに関する研究は，その評価や地域連携を中心に行われており，中でも花緑イベントに

関する研究としては，全国レベルで行われている都市緑化フェアを対象としたものや，地域レベルで行われているオープンガーデンなどを対象とした既往研究がある．しかしながら，地方レベルで行われている花緑イベントを対象とした研究が見られない．また，地方都市レベルの花緑イベントの特性を把握することは，全国的な花緑イベントと異なるレガシーの発見も考えられ，今後のグリーンインフラの推進を行う上で有意義と考えた．

このため本研究では，地方都市における花緑イベントを通じた事業を把握するとともに事業評価を通じて，意義や今後の在り方について検討を行った．

(3) 本研究の進め方

本研究は，群馬県で行われている花緑イベントを中心とする政策である「花と緑のぐんまづくり」を対象とする．はじめに，「花と緑のぐんまづくり」の概要と花緑イベントが群馬県内の各市町村で如何に実施されたのかについてまとめる（2章）．次に花緑イベントと地域連携との関わりに着目しその特性を分析する（3章）．地域連携の特性を踏まえて，「花と緑のぐんまづくり」事業の成果についてヒアリング調査により評価を行う（4章）．最後に成果を総括するとともに今後の花緑イベントのあり方について考察を行う（5章）．

2． 花と緑のぐんまづくり

(1) 花と緑のぐんまづくり

群馬県では，2008年3月29日～6月8日(72日間)に全国都市緑化フェア「花と緑のシンフォニーぐんま2008」が開催された[9]．開催期間中は，高崎市と前橋市をメイン会場に期間中142万人の来場者があった．その理念は，『（メイン会場を中核としつつも）県土全体での展開と，併せて広く県民の参加を呼びかけ，県民の参加と，行政との連携による協働での企画・運営・管理を行うこと，そして未来を担う子どもたちへ継承』であった．

「花と緑のぐんまづくり」は，全国都市緑化フェアの理念を引継ぎ，県民と力をあわせ花と緑あふれる，活力ある，美しい地域にするための事業として，2009年に群馬県が策定した事業である．この事業は，「花と緑のぐんまづくり推進協議会」による官民協働で実施，運営されている．また，群馬県内の12の土木事務所ごとに地域協議会が設立され，協働で県内のそれぞれの地域に根ざした花と緑の活動を支援している．

「花と緑のぐんまづくり」を推進するために，「花と緑のぐんまづくり推進プラン」が同年に策定された．この計画は，「花と緑あふれる県民参加の県土づくり」を基本理念に掲げ，①花と緑を活かした新しい県民参加型事業の展開，②多様な主体の参画する推進体制の構築，③多様な意見を取り入れつつ事業をブラッシュアップという3つの展開方針を設定している。

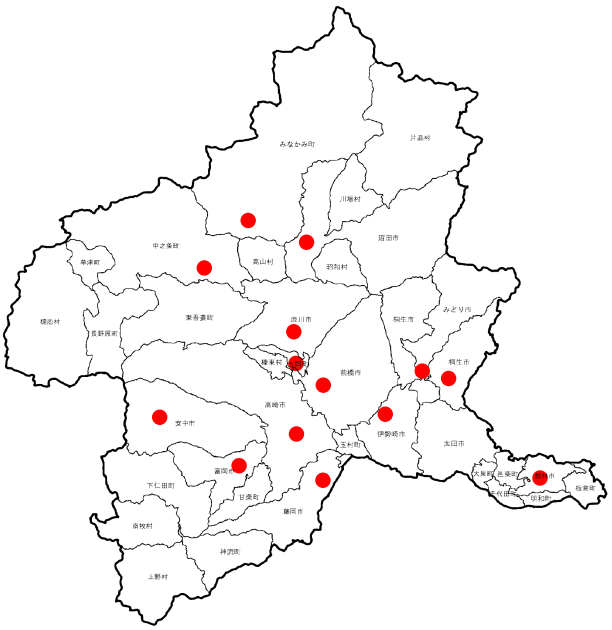


図-1 花と緑のぐんまづくり花緑イベントの実施会場

表-1 花と緑のぐんまづくり花緑イベント開催状況

開催都市	開催年度	開催期間	会場飾花数	来場者数
高崎市	2009	4~5 月	10 万株	30 万人
館林市	2010	4~5 月	7 万株	13 万人
渋川市	2011	7~10 月	10 万株	20 万人
前橋市	2012	4~5 月	10 万株	31 万人
伊勢崎市	2013	4~5 月	10 万株	29 万人
沼田市	2014	4~5 月	7 万株	15 万人
中之条町	2015	4~5 月	18 万株	16 万人
みどり市	2016	4~5 月	11 万株	16 万人
富岡市	2017	4~5 月	6 万株	20 万人
安中市	2017	4~5 月	9 万株	16 万人
吉岡町	2018	4~5 月	4 万株	7 万人
みなかみ町	2019	8~9 月	7 万株	12 万人
藤岡市	2020	4~5 月	18 万株	6 万人
桐生市	2021	4~5 月	(未開催)	(未開催)

(2) 花と緑のぐんまづくり花緑イベント

この理念と方針のもとに，花と緑のぐんまづくり推進事業を実施することとしており，その中の事業として，県内全市町村を対象に持ち回りで毎年実施する花緑イベントである『花と緑のぐんまづくり～ふるさとキラキラフェスティバル～』が実施されている（**図-1**）．

花と緑のぐんまづくりは，2020年3月末現在において延べ累計で12回開催されており，2021年の桐生市での開催を以って本事業を終了する予定である．**表-1**は，花と緑のぐんまづくりの各市町における開催状況について開催期間，会場飾花数，来園者数をまとめたものである．

第12回開催の藤岡市では，新型コロナウイルス感染拡大防止のため，実質的なイベントを実施することが不可能であった．このため，同表の来場者数は前年度に開催されたプレイベント時の人数を記載している．

開催期間は，4～5月の春季に開催した市町が最も多く，渋川市が7～10月，みなかみ町が8～9月の夏季に開催している．会場の飾花数は，中之条町と藤岡市が18万株であり最も多い．吉岡町が4万株で最も少なかった．

来場者が最も多いのが，前橋市31万人，最も少ないのが藤岡市6万人，吉岡町7万人であった．なお、藤岡市はコロナ禍での開催でありプレイベントのみの値である。

(3) 地域連携の関連事業

「花と緑のぐんまづくり推進事業」には，この花緑イベント実施に合わせて地域との連携強化を図るための事業がある．概要を**表-2**に示した，花と緑のクリーン作戦，花のゆりかごプロジェクト，ぐんま美緑花PR作戦，花と緑の総合行政推進といった4つの関連事業である．

「花と緑のぐんまづくり推進事業」の最大の特徴は，地域との連携強化をねらいとした，住民や農業高校が協力して草花を育成し，「街・里（まち）」や「自宅」に花を供給する花のゆりかごプロジェクトであり，高校生が地域連携のアジェスターとして参加していることである．また，花きの多様な機能（癒し・情操の向上，地域のコミュニケーションの創造）に着目し，花きを教育，地域活動等に取り入れる「花育」という取り組みがある．

「花育」とは，幼児や児童に，やさしさや美しさを感じる情操面の向上，農と接する体験教室の機会を与えることであり，花きを介した世代間交流の促進と地域コミュニティの再構築をねらいとした事業である．

表-2　花と緑のぐんまづくり地域連携の関連事業

花と緑のクリーン作戦	社会資本ストックの維持管理のパートナーとして，県管理の道路や河川等における草刈り等の維持管理活動や花植活動に対して支援を行う
花のゆりかごプロジェクト	住民や高校が協力して草花を育成し，「街・里（まち）」や「自宅」に花を供給するもの
ぐんま美緑花（みりょくか）PR 作戦	ホームページや観光関係機関との連携し，ぐんまの花と緑の認知度 up 作戦を図るもの
花と緑の総合行政推進	「ぐんま花のまちづくりコンクール」や「国産花きイノベーション推進事業　花育」といった他の施策との連携強化を図るもの

表-3　地域連携の活動項目

1	農業高校の有無	10	地域の飾花への参加
2	高校へ花苗の提供	11	地域の維持管理の参加
3	高校の飾花の参加	12	イベントの継続
4	高校の花育指導	13	オープンガーデンの継続
5	高校のステージ・展示の参加	14	新規イベント事業
6	高校の花苗の販売	15	新規オープンガーデン
7	子どもへ花育指導	16	新規体験教室
8	子ども飾花の参加	17	育苗・飾花の地域活動
9	子どもステージの参加	18	維持管理の地域活動

市町村	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
高崎市		●								●	●							
館林市		●		●	●		●	●		●	●	●			●			●
渋川市		●		●	●		●		●	●	●	●		●		●	●	●
前橋市	●	●	●			●	●	●		●	●	●	●					
伊勢崎市		●	●							●	●		●				●	●
沼田市	●	●	●			●		●		●	●							
中之条町	●	●					●	●		●	●	●					●	●
みどり市		●					●	●		●	●							●
富岡市	●	●	●				●	●		●	●					●	●	●
安中市		●					●	●		●	●		●				●	●
吉岡町		●					●	●	●	●	●						●	●
みなかみ町		●	●					●		●	●							
藤岡市	●	●	●		●	●	●	●	●	●	●						●	●

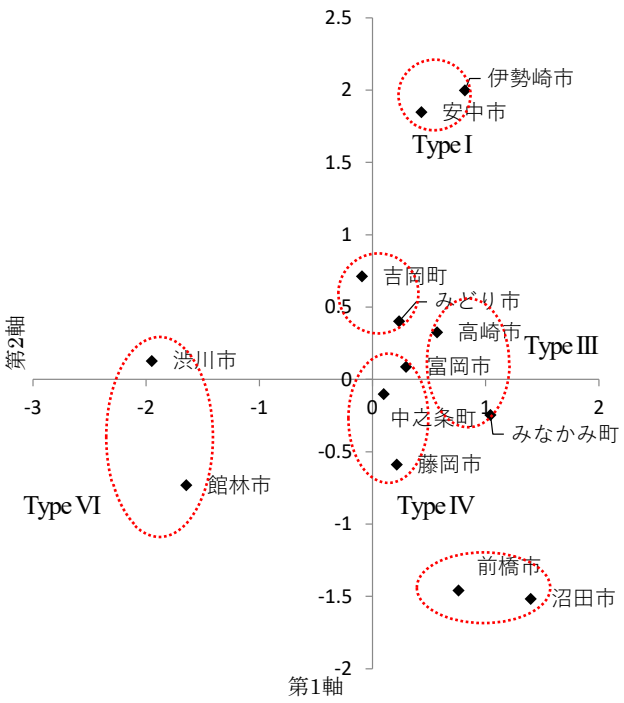
図-2　各市町村の活動状況

3．花緑イベントの特性把握

(1) イベントの活動項目

「花と緑のぐんまづくり」事業における花緑イベントを評価するために，「花と緑のぐんまづくり」事業の地域関連事業の取組み状況，高校生・子どもの参加状況，花緑イベントのレガシー（継続・新規）から18項目の活動項目を**表-3**のとおり設定した．活動項目は，農業高校の有無の他，高校や子どものイベントの参加の状況，地域の飾花や維持管理の参加状況，レガシーとしてのイベントやオープンガーデンの継続性や新規事業，育苗や飾花の地域活動，維持管理の有無を評価した．

図-2は，11市町村が花と緑のぐんまづくり花緑イベントを実施するにあたり，活動項目の内容に該当の有無をまとめたものである．表と図より，前橋市（勢多農林高等学校），沼田市（利根実業高等学校），中之条町（中之条高等学校），富岡市（富岡実業高等学校），藤岡市（藤岡北高等学校）に公立の農業高校がある．活動項目が最も多い市町村は，渋川市(12)と藤岡市(12)であり，最も少ない市町村は，高崎市(3)であった．全ての市町村が実施した活動項目は，「高校からの花苗の提供」「地域の飾花への参加」であった．



軸	固有値	累積寄与率	相関係数
1 軸	0.294	28.7%	54.2%
2 軸	0.203	48.5%	45.0%

図-3　数量化理論Ⅲ類による分析結果

また，「高校の花育指導」を実施した市町村は，館林市と渋川市のみであり，オープンガーデンを新規で行った市町村は館林市のみであった．

(2)　イベントの活動特性

「花と緑のぐんまづくり」事業における花緑イベントの市町村の活動やレガシーの特性をより具体的に把握するために分析を行った．分析は先に設定した18個の活動項目のデータをダミー変数として用いて数量化理論Ⅲ類により行った．**図-3**は数量化理論Ⅲ類により得られた2軸のカテゴリスコアを用いてマッピングしたものである．

図より，1軸のプラス側にオープンガーデンの継続をレガシーとした伊勢崎市と安中市が付置され，2軸のマイナス側にオープンガーデンの新規事業をレガシーとしたる渋川市が付置された．また，第1象限は，地元住民の活動項目を持つもの，第4象限は，農業高校がある市町村が付置されるなど高校生の関与が意味づけられた．分析結果より，花緑イベントの活動状況とレガシーについて，以下の6つのタイプに類型化することができた．

Type I（伊勢崎市，安中市）

レガシーとしてオープンガーデン継続がある．第9回開催の安中市では開催以降もオープンガーデンを継続している．第5回開催の伊勢崎市でも，オープンガーデンを継続しており，2013年の開催時は参加数が10件であったが，2018年には28件に増えている．第9回開催の安中市では，市民とともにつくった約24,000株の大花壇を中心に，子どもとつくったお絵かき花壇や花のピラミッドが会場を賑わせた．

Type II（吉岡町，みどり市）

レガシーとして地域活動の維持管理がある．第8回開催のみどり市では，メイン会場のながめ公園やサテライト会場の岩宿の里，富弘美術館の花壇をイベント後も維持管理している．第10回開催の吉岡町でも，サテライト会場であった道の駅よしおか温泉に設置した花壇をイベント後も維持管理している．また，地域の自治会が環境美化のために沿道の飾花を始めた．

Type III（高崎市，みなかみ町）

レガシーとしてのイベントや維持管理等の地域活動もない．第1回開催の高崎市では，担当者によるレガシーについての調査を行ったところ，主だったレガシーはなかったものの，都市緑化フェアのメイン会場であったことから花と緑のぐんまづくり以前より地域として取り組みをしていたことも考えられた．第11回開催のみなかみ町では，2019年に開催され，翌年の2020年は新型コロナウイルスの影響で 主だったイベントが実施できず，現段階ではレガシーが存在しない．

Type IV（富岡市，中之条町，藤岡市）

農業高校が立地するグループである．第7回開催の中之条町では，中之条高校の生徒の参加による花苗の提供，第9回開催の富岡市では富岡東高校の生徒の参加による箏曲の演奏が行われた．第12回開催の藤岡市では，前年度の開催地であったみなかみ町に設置したPR花壇のデザインから制作までを藤岡市の高校である，藤岡北高等学校の生徒が関わっている．

Type V(前橋市，沼田市)

高校生が販売したグループである．第4回開催の前橋市では，物産販売で県内商業　高校が出店しているなど，農業学科の高校以外も，活躍する場面があった．第6回開催の沼田市でも，市内の飲食店や物産振興会とともに，高校生が飲食・物産ブースを開設した．

Type VI（渋川市，館林市）

レガシーとして新規事業を展開したグループである．

第2回開催の館林市では，翌年度以降，毎年5月の大型連休に花と緑のフェスティバルと題してイベントを実施している．また，農業学科以外の高校生の関わりとしては，地域の名産品である館林紬を地元の高校生がデザインし，工房や行政と協働し展示を行っている．第3回開催の渋川市では，市民協働による飾花拠点の維持管理を2016年度から市内5箇所で行っている．高校生の関わりとしては，農業学科の高校生が地元の小学生に花育を指導した．

４．花緑イベントの評価

(1) 関係者へのヒアリング

前章では花緑イベントの活動項目を設定した上で，各市町村のイベントの特性を把握した．この結果を踏まえて類型化された市町村の花緑イベントの活動を評価することによって地域連携とイベントが実施される過程で高校生の参加や役割が特徴的であった．

そこで，本章では，花緑イベントにおける地域連携と高校の参加や役割をより具体的に明らかにするためヒアリング調査を実施した．ヒアリング対象者は，行政担当者として，事務局である群馬県の担当者，イベント開催地の藤岡市の担当者，農業高校の教員として携わった教諭，イベントに参加した生徒を対象として合計4名に行った．

設問は「花緑イベントが成功した要因」と「花緑イベントのレガシーは何でしょうか？」と尋ね，農業高校の生徒には，後者の花緑イベントのレガシーのみを尋ねた．

(2) 花緑イベントの成功の要因とレガシー

表-3は，設問について得られた回答である．

「花緑イベントが成功した要因」については，「活動の中心となり周囲を巻き込む民間のリーダー的な存在」（県担当者）「準備段階から行った行政・民間・教育の連携」（市担当者）「地域の魅力や地域資源について意見を出し合い，デザインから携わった」「活動の様子がマスコミに紹介され生徒の自信ややりがいに繋がった」（高校教諭）が挙げられた．

また，「花緑イベントのレガシー」については，「事業実施後も観光資源として継続して会場が整備されたこと」（県担当者）「会場で引き続き花壇を整備する団体があらわれ事業の理念が継承されていること」（市担当者）「行政と連携した事業が継続して実施されることが生徒の経験に活かされる」（高校教諭）が挙げられた．

農業高校の生徒からは，「（花緑イベントの参加や役割の）経験を通して人と人とを繋ぐ仕事に就きたいと進路を考えるきっかけにもなった」との回答があった．

このことから，花緑イベントの成功の要因としては，行政・民間・教育が連携したことが考えられた．また，来場者が多かった会場では，中心となる人物が地域を巻き込む様子が見られた．さらに，教育の観点からは，高校生が主体的に関われる機会を創出し，活動を多くの人に見てもらい，メディアにも取りあげられることで，生徒の自信ややりがいに繋がったこと，経験を通じて人と人とを繋ぐ仕事に就きたいと進路を考えるきっかけにもなったことが明らかになった．

表-3 関係者のヒアリング結果

日時	2020年11月27日（金）
担当	群馬県都市計画課　担当
該当市町村	中之条町
回答	他の会場に比べ，事業の実施に多くの地域や主体の関わりがあった．その要因のひとつが，活動の中心となり周囲を巻き込む民間のリーダー的な存在と行政との協働があった．また，事業実施後も，観光資源として継続して会場を整備し，多くの来場者で賑わせている．
日時	2021年1月13日（水）
担当	藤岡市都市建設部都市施設課
該当市町村	藤岡市
回答	前年度開催のプレイベントを含め，準備段階から行政・民間・教育の連携が見受けられた．会場の一部で引き続き花壇を整備する団体があらわれるなど，事業の理念が継承されている
日時	2021年1月13日（水）
担当	群馬県立藤岡北高等学校 教諭
該当市町村	前橋市，藤岡市
回答	【前橋市】【藤岡市】花壇制作では，生徒が各々の地域の魅力や地域資源について意見を出し合い，デザインから携わった．活動の様子は，自治体の広報や新聞，地元テレビなどに紹介され，生徒の自信ややりがいに繋がったのではないか．今後も，行政と連携した事業が継続して実施されることで，生徒の経験に活かされる．
日時	2021年2月22日（月）
該当市町村	群馬県立藤岡北高等学校生徒
該当市町村	藤岡市
回答	【藤岡市】花壇制作は，生徒が主体的になり取り組めた良い機会となった．制作ではリーダーの役割を担い，仲間と協力してゼロから作り上げた経験は高校生活の一番の思い出であった．また，この経験をとおして，人と人とを繋ぐ仕事に就きたいと，進路を考えるきっかけにもなった．行政と学校との連携は今後も続けてほしい．その際は企画段階から生徒も関わりたい．

５．まとめ

(1) 本研究の成果

「花と緑のぐんまづくり」では，地域連携に関する活動項目を設定して分析することにより実施した市町村を6つのタイプに類型化することができた．また，タイプ毎に活動とレガシーを評価することによって行政との地域連携，農業高校の生徒の参加による協働による実施体制の特性が明らかになった．さらに，行政担当者，農業高校の教諭，農業高校の生徒からのヒアリングを行うことにより，本研究により明らかにされた花緑イベントの特性とレガシーについて**図-4**のようにまとめることができた．図より，花緑イベントは，行政・地域・農業高校の協働体制で運営されるとともに，その体制の核として，周囲を巻き込む民間のリーダー的な存在がイベントの成功に大きく影響したと考えられた．花緑イベントのレガシーとして，①観光資源としての空間整備（広域圏域的），②生活環境向上・コミュニティ形成（居住圏域的），③高校生の社会参加経験の醸成（学校教育的）と

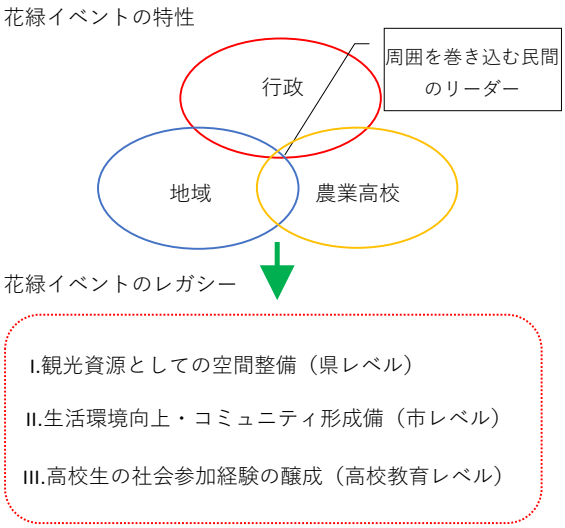


図-4　花緑イベントの特性とレガシーのイメージ

いう3つのレガシーがあることが考えられた．特に高校生の社会参加経験の醸成は，花緑イベントのレガシーとして教育面から捉えられる貴重なレガシーと考えられた．

本研究で，事業評価として，来場者数や飾花数，またその後の維持管理を行っている団体数など，定量的評価も重要だが，表-2での高校生へのヒアリング内容にもある定性的評価も同様に重要であることがわかった．行政の事業に参加することで，高校生活の一番の思い出になり，その後の進路を考えるきっかけにもなったことは，定量的な把握が難しいものの，事業の大きな成果だと考える．

藤岡市では，高校との連携を継続しており，市の独自事業として行う，「ネクスト花と緑のぐんまづくりin藤岡」では，PR動画への出演を生徒に依頼した．また，2021年3月20日に実施されるオープニングセレモニーでは，「花と緑のぐんまづくり」に関わった，表-2でヒアリングを行った生徒が登壇し，事業への想いや自身に与えた影響について語る予定である．

行政が実施する事業に，地域の高校生が主体的に参加することで，地域の大人と関わる機会が創出され，将来の視野が広がり，また地域への愛着の醸成に繋がるのではないだろうか．そして，このことが今後の持続可能な社会に求められていることのひとつと考えられる．

(2)　今後の課題

今後の研究課題として以下が考えられた．

1) 開催地によっては，新規イベントやイベントの継続的な実施，その後の花壇等の維持管理を半数以上の開催地で続けている．今回の研究成果を踏まえて，図4を論証するデータを収集しながら，民間のリーダー的な存在の影響など，定量的なモデルを構築していくことが課題と考える．
2) 花緑イベントと高校生の関わりが学校教育に，どのような影響を与えたのかをモニタリングしていくことが課題と考える．
3) 2008年の全国都市緑化フェアにおいて準備段階の活動を把握すること，併せて，メイン会場・サブ会場・サテライト会場における各々の取組みが今回の花緑イベントの実施とその後のレガシーにどのように影響を及ぼしたのかを検証していくことが課題と考える．

参考文献

1) 国土交通省グリーンポータブルサイト：https://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/environment/sosei_environment_tk_000015.html (2021.3.1 閲覧)
2) 奥村誠：イベント効果を考慮した地域整備投資に関する研究，土木計画学研究論文集，No.8，pp.273-280，1991.
3) 引地博之，青木敏明：まちづくりの計画過程に対する参加行動の規定因とその地域差，土木計画学研究論文集，No.23，pp.237-242，2006.
4) 尹紋榮，柳井重人，田中聖美：市民団体ネットワークを運営主体とした民有樹林地の公開イベント活動の成果と課題，ランドスケープ研究，Vol.76，No.5，pp.707-712，2013.
5) 野中勝利：緑のイベント時におけるオープンガーデンの位置づけ，ランドスケープ研究，Vol.69，No.5，pp.789-794，2006.
6) 三分一淳，湯沢昭，熊野稔：オープンガーデン実施者の開放性に関する意識構造の検討，ランドスケープ研究，Vol.70，No.5，pp.391-396，2007.
7) 吉武哲信，瀬内月菜，寺町賢一：中心市街地活性化に関わる市民イベントの活動継続要件に関する研究:日向市駅前広場で活動するイベント団体を対象として，都市計画学会論文集，Vol.55，No.2，pp.147-156，2020.
8) 中村優里，片桐由希子：全国都市緑化フェアの効果とイベントレガシーとしての評価，都市計画論文集，Vol.54，No.3，pp.268-275，2019.
9) 群馬県ホームページ「花と緑のぐんまづくり」https://www.hanatomidori.net/ (2021.3.1 閲覧)

(2021. 3. 7 受付)

STUDY ON THE CHARACTERRISTICS OF THE EVENT AND EVALUATION OF REGIONAL COOPERATION IN "FLOWER AND GREEN GUNMA MAKING"

Takuya MATSUDA, Shinya TSUKADA, Shinji YAMADA and Tetsuo MORITA